

NPO共働学舎と農事組合法人共働学舎新得農場

－世界で一番に選ばれたチーズをつくり、販売する－

1. はじめに

本報告では、さまざまな施設での受け入れが困難な人々を受け入れ、多くの人々が共に、生活する場、そして働く場をつくり出してきた「新得共働学舎」の取組みについて紹介する。農業生産、加工、開発、販売を行い、個人そして法人としての自立をはかっている。自分でやりたいことを探し出し、一人一人が役割を見出し、家事・仕事において分担・分業している。心や体に問題を抱えた人々が農の取組みを通じて自立し、自己実現をはかっている。ここでは「障がい者」「福祉」という言葉があてはまらない取組みが行われている。

2. 組織の沿革と事業概要

「新得共働学舎」は、NPO共働学舎（新得共働学舎）と農事組合法人共働学舎新得農場からなる（以下、両方をあわせて「新得共働学舎」とする）。NPO新得共働学舎は主として生活の場、農事組合法人共働学舎新得農場は農業生産、加工、販売の場となっている。

「新得共働学舎」はさまざまな問題を抱えた人々が集まる。行政用語でいう知的障がい者・精神障がい者・身体障がい者や触法障がい者・引きこもり・不登校児・ニートなどである。他にその人々と共に生活する職員・ボランティアなどがある。また、海外からの留学生やボランティアも受け入れている。

宮嶋望理事長（以下、宮嶋氏とする）は学校を卒業し、4年間、アメリカのウィスコンシン州の農場に修行へ出た。1978年に帰国すると、父（1974年に長野県で最初の「共働学舎」を設立した創始者）から北海道の新得町で「新得共働学舎」を設立してはどうかという提案があった。当時、新得町と長野県の共働学舎において交流があり、新得町長がその理念に深く賛同していたことから、新得町から町有地30haの無償貸与の申し出があり、同町への開設が決まった。

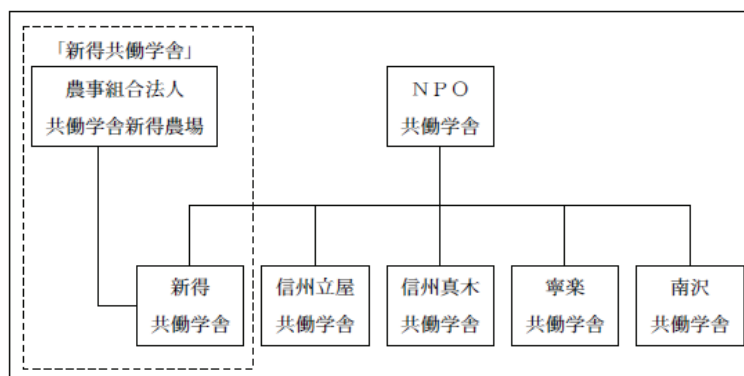


図1 組織図

5つの共働学舎は、当初、任意団体や農事組合法人として活動していたが、2005年に任意団体からNPOとなった。NPOとした契機は、共働学舎新得農場においてチーズで高収益があるようになったためである。税務署から、任意団体としての税務上の問題を指摘され、組織・体制を整備することとなった。

NPOから農事組合法人へ人材を派遣し、農事組合法人が農業生産やチーズ等の加工・販売などの収益事業を行う形態をとっている。なお、7～8名が、NPOおよび農事組合法人の事務等スタッフとして兼務している。

経営の自立をはかるため、1991年に牛舎、搾乳室、チーズ工房を建設するために1億1,200万円の投資を行った。なお、共働学舎から1,100万円、農業関連の資金5,700万円を借り入れた（現在はいずれも完済）。NPO設立数年後には自立経営を実現している。

メンバーの多くが北海道出身者であり、20代から50代の職員（6～7名）、ボランティア（5～8名）、パート（7～8名）を含め約60名程度がさまざまな活動に取り組んでいる。精神・知的・身体の問題を抱える者、ニート、引きこもりだけでなく、留学生、職員、ボランティア、パートも共同生活、共同生産を行う。「新得共働学舎」内で生活するのは5家族（うち1家族は親子）、通って来るのは5家族で、親子、夫婦、兄弟でかかわっており、それ以外の者は独身者である。

3. 農業関連分野における障害者就労の実態

（1） 農業生産

約43haが町有地（現在は借地料を支払っている）で、この他、約15haが借地、約20haを購入した。牧草地約38ha、放牧地約27ha、原野約12haとなっている。もともとの地目は原野や牧草地などで、徐々に農地規模を拡大していった¹。



写真：学舎の立地する傾斜地

¹ 2011年現在、約100haまで拡大している。

農薬、化学肥料を全く使わないバイオダイナミック農法²による有機野菜生産の畑約3ha、その他は厩舎や住宅のスペース、道路、そして牧草地および原野となっている。農業生産としては畜産生産と野菜生産が中心であり、乳牛120頭（うち育成牛約60頭）、肉牛5頭、母豚40頭・種豚1頭、鶏（鶏卵用）206羽、羊20頭を飼育している。

乳牛には12名、肉牛2名、豚2名、鶏4名、羊1名が従事している。野菜はボランティアの指導を受けながら12～15名程度が従事している。なお、乳牛・肉牛・鶏については他部門と兼務し、野菜については多くの者が手伝っている。



写真：床下に炭を敷き詰めた乳牛の厩舎

牛の餌については2/3を自給している。鶏は平場で飼い、牛も豚も牧草地に放牧している。なお、道と協力し、2006年度から3カ年計画で牛の林間放牧地造成事業にも取り組んだ。

（２） 加工，販売

加工については、農産物を加工し、チーズ・ソフトクリーム・クッキー・ケーキ・パン、フェルト人形や座布団などの生産を行っている。

1993年に、敷地内に町の全額補助により「新得町特産品加工研究センター」が建設された。これはある自閉症のメンバーが、自分で1年間働いて貯めたお金全額（約15万円）を、自分の意志で「24時間テレビ 愛は地球を救う」に寄付したことが町長に伝わり、その感動がセンター建設のきっかけとなった。今日の「新得共働学舎」における開発・加工の大きな礎となった。

加工品に加え、野菜などの販売は施設内の交流センター「ミントル」において行っている。また、「ミントル」ではレストランとして、チーズやワインなどの飲食を楽しむこともできる。この他、チーズについてはインターネットやFAXでの注文販売を行っている。

² シュタイナーが提唱した農法。農地は、木・森・湿地・川そして、家畜としての動物で構成される。農地では、家畜の餌も収穫し、家畜の糞を堆肥として利活用している。



写真：販売、交流センター拠点「ミンタル」

チーズは新得町から車で1時間ほど離れたところにある帯広市の飲食店街のワインバー，居酒屋など数軒のメニューとして並んでいる。また，東京の飲食店にも出荷している。

（３） チーズ工房

チーズ工房では，製造5名，包装・発送6名，販売2名が従事している。チーズ生産では，弱みである傾斜地・寒冷地を活かすことで，そして効率的な生産が難しいといわれるさまざまな問題を抱える人々が，ゆっくりと丁寧な作業が要求される生産に従事することで，高い付加価値を創出している。



写真：自分たちで建てたチーズの貯蔵庫



写真：チーズ

例えば、搾乳した牛乳は電動機械を用いて加工施設へ運ばれると、その過程で電位が失われ固めることが難しくなることから、一般的には塩化カルシウム等を添加しなければならない。だが、地形の傾斜（重力）を利用することで機械を使わずに運ぶことが可能となり、よりおいしいチーズの生産につながった。

4. 地域貢献

「新得共働学舎」が、新得町に開設されたことで、それまでほとんど事業として活用されていなかった町有地が有効に活用されることになった。近年では、離農せざるを得ない近隣の農家から農地の購入依頼を受けるなど、地域の遊休地の活性化に期待される存在となっている。また、ここで生産されるチーズが世界で数々の賞を受賞したことなどにより、その新得町の知名度を高めることにもつながった。



「さくら」



「ラクレット」



「笹ゆき」

写真：表彰されたチーズ

さらには、地域の関係団体や個人との連携による生活や事業を営んでおり、相互の交流の機会を創出することにもつながっている。

5. 今後の課題

「新得共働学舎」の課題としてあげられるものは、一つ目は宮嶋氏の後継者の育成である。二つ目は高齢化するメンバーへの対応があげられる。

学舎では、後継者はメンバー全員の合議で決められていくことが望ましいとされている。宮嶋氏の熱意、行動力、アイデアがここまで組織をつくりあげてきた。それは宮嶋氏がリーダーおよび経営者としての才覚を発揮してきたからである。したがって、これからも、つくりあげられてきた「新得共働学舎」の理念、そして事業を継承していくことできる後継者の育成が求められる。

また、メンバーも高齢化しつつあることから、組織としての対応が求められる。そのためには行政や地域のNPOや介護保険事業者等と連携をはかることが重要である。すべてを「新得共働学舎」で対応するのではなく、地域と連携、つまり「共働」していくことが重要になる。

6. おわりに

「新得共働学舎」へやって来た人々は、最初、どうしたらよいのか戸惑うということである。それは「何をしてください」ということがないためである。一般的な福祉施設では1日の生活スケジュールや仕事内容も、本人や家族とも話し合うが、主に事業所の側で決めることが多い。しかし、「新得共働学舎」では、毎日、「今日は何をしたいのか」ということだけを聞く。

やって来た人々の多くは、まずはやりやすい、みんなのご飯づくりの手伝いや片付けから始める。その後、クッキーやケーキづくり、そして農作業に従事したいという気持ちが徐々に芽生えるようになる。

そこで、その作業を実際に体験してもらいながら、本当にできるのかどうか、本当にやりたいのかどうか自分で判断・納得してもらうこととしている。

それまで家事もやったことのない者が、家事を手伝い、仕事をするようになる。自分のいる場があり、自分の役割が見つかることで、心も体も大きく変化していくとのことである。「新得共働学舎」では、世話をする人、世話をされる人には分けない。それぞれが自分でやりたいこと、できることをやり、他の人ができなければ誰かが支援し協力する。

つまり、ここには本来の「助けあい」、「共働」の精神がある。私たちは日常の中で、障がいをもった人々、高齢者、子供は「世話をしてあげる」存在として認識しているのではないであろうか。本来なら一個の人間として認識しなければならないであろう。

宮嶋氏の奥様は「私は学舎が世の中からいらなくなって欲しいと思う」と言う。それは障がいの有無も関係なく、多様な価値を持った者が一緒に当たり前のように暮らせる社会になることが最も望ましい世の中であるということである。そこには「障がい者」も「福祉」という言葉も消えている。

(濱田 健司)